

賞賛獲得欲求は社会的排斥リスクと自己実現のどちらに 基づくのか？

— A. Maslow の欲求理論における賞賛獲得欲求の階層水準とメンタルヘルスへの
影響について —

杉 山 崇¹⁾ 宮 口 ま な²⁾

Which is praise seeking need based on, social exclusion risk or self realization?: A study
about levels of Maslow's hierarchical theory of needs and influence for mental health.

Takashi SUGIYAMA¹⁾ Mana MIYAGUCHI²⁾

【Abstract】

Present study has two aims to consider the level of needs about praise seeking need and to verify the influence of praise seeking need for mental health. It is unclear that seeking praise would have been base on lower or higher needs about Maslow's hierarchical theory of needs. If praise seeking needs is higher, then enhancing mental health, but if praise seeking need is lower, then inhibiting mental health, because if the dimensions of needs are different, its neural basis is also different. The results of research for undergraduate students, Covariance Structure Analysis among sense of acceptance and rejection, social skill, self-preoccupation suggested that praise seeking need would be higher and lower level need both. Partial analysis of variance, about influence for the process of enhancing depression by sense of rejection and self-preoccupation, suggest that praise seeking need would reduce depression in female sample group, and would enhance depression in male sample group.

Keyword: praise seeking need, Maslow's hierarchical theory of needs, social exclusion risk, self realization

【要 旨】

本研究は賞賛獲得欲求における欲求の次元とメンタルヘルスに与える影響を検討すること

1) 神奈川大学人間科学部教授／神奈川大学心理相談センター所長 (Faculty of Human Sciences/Psychological and Counseling Service Center, Kanagawa University)

2) 神奈川大学人間科学部人間科学科心理発達コース4年 (Faculty of Human Sciences, Kanagawa University)

を目的にしている。賞賛を希求することは、Maslow の欲求階層説における社会的安全や所属を確保するための低次の欲求に基づく場合も、自尊や自己実現といった高次の欲求に基づく場合も考えられる。欲求の次元が違えばその神経基盤も異なるので、高次の余裕であればメンタルヘルスを増進する一方で、低次の欲求であればメンタルヘルスを阻害する可能性がある。学生を対象にしたリサーチを行ったところ、被受容感、被拒絶感、社会的スキル、自己没入との関連を検討した共分散構造分析は高次の欲求でも低次の欲求でもある可能性を示唆していた。被拒絶感、自己没入が抑うつ傾向を高めるプロセスへの関与を検討した部分分散分析では、女性では抑うつ傾向の軽減が、男性では抑うつ傾向の増進が示唆された。賞賛獲得欲求の次元や効果は更に検討する必要があるといえるだろう。

キーワード：賞賛獲得欲求，Maslow の欲求階層説，社会的排斥リスク，自己実現

1. 問題の所在

心理相談活動の実務では、対象者が「何もやる気がしない」と訴えるなど「やる気」の問題が訴えられることがある。やる気は心理学では動機づけ（motivation）という研究課題で主に扱われ、心理学には動機づけの変動プロセスを示唆する数々の信頼できる理論やモデルが蓄積されている（e.g., 杉山, 2010a）。動機づけの予測と制御に関わるほぼ全ての理論やモデルの共通要素を探るとしたら、動因すなわち欲求を動機づけを推進する心のエネルギーと考えることだと言えるだろう（杉山ら、印刷中）。そこで、本研究では社会的場面での積極性に関わる欲求、賞賛獲得欲求についての研究を試みよう。

賞賛獲得欲求とは「自己の肯定的な側面を他者に認めてもらいたい、認めてもらうための行動をしたい（小島, 2016）」という欲求である。小島ら（2003）によると他者からの肯定的評価から満足を得て、同じくネガティブなフィードバックには嫌悪感を得るためには必要な欲求とされている。言いかえれば他者からの肯定的な評価の獲得・維持とネガティブ・フィードバックの回避を誘因（強化子）とし、人を他者から喜ばれ、讃えられる行いに動機づける欲求と言えるだろう。近年の産業領域実務の中では肯定的な評価やネガティブなフィードバックを受けてもやる気が出ない従業員の処遇に悩む人事担当者や管理職が多い印象がある。賞賛獲得欲求はこの問題を考える手がかりになるかもしれない。そこで本研究では欲求のダイナミズムを階層性から考察した Maslow（1943）の欲求階層説、目的意識によるワーキングメモリ（Working Memory：以下、WM）制御の認知神経科学的基盤を論じた苧坂の理論（苧坂, 2007：本研究では意識のワーキングメモリ理論と呼ぶ）および苧坂の理論を無意識的な欲求に拡張して論じた杉山の理論（杉山, 2014：本研究では意識と無意識のシアター＆スポットライト理論と呼ぶ）から賞賛獲得欲求について考えてみよう。

まず、Maslow の欲求階層説から考えてみよう。賞賛獲得欲求は社会的な欲求の一つと考えられる。Maslow によると社会的な欲求は社会的な安全（社会的排斥を受けるリスクの排除：Leary & Kowalski, 1990）、愛情・所属の欲求、自尊・尊厳の欲求に分けることが出来る。このうち、安全および愛情と所属の欲求は人が社会的存在として生き抜くには不可欠な欲求で相対的に低次の欲求とされ自尊・尊厳の欲求は自己実現の手前のプロセスとして相対的に高次の欲求と考えられている。

賞賛獲得欲求を低次と高次のどちらの欲求とみなせるかは賞賛獲得の目的をどのように考えるかで解釈が分かれる。仮に目的を「自分は賞賛に値する人間である」という一種の自己確認と捉えれば自尊・尊厳の欲求の一部と考えられる。Maslow の階層説によると高次の欲求は低次の欲求が満たされることではじめて改發されるとされている。よって、賞賛獲得欲求は社会的な安全と愛情・所属の欲求が満たされている状態、すなわち社会的排斥リスクを感じず、社会的存在としての自分を周囲が受け入れていることにそれなりの確信があることで改發されると言えるだろう。

この場合、苧阪（2007）および杉山（2014）の理論によると賞賛獲得欲求の神経基盤は表象の想起や比較と関連する前部前頭背外側皮質（VLPFC）が関わっていると考えられる。VLPFC の活性は痛みの緩和に関与するという所見が見出されている（Zald & Rauch, 2006）。痛みの緩和はストレス緩和でもあるので、賞賛獲得欲求が高まることでストレスに伴うメンタルヘルスのリスクが緩和されると考えられる。

一方で、賞賛獲得の目的を社会的排斥リスク軽減、すなわち社会的安穩の確保の欲求と捉えれば、低次の欲求の一部と考えられる。この場合、苧阪、杉山の理論によると社会的排斥リスクをモニタリングしているとされる前部帯状回（ACC）と自己への賞罰に敏感な前頭前野内側皮質（MPFC）の亢進が賞賛獲得欲求の神経基盤の一部と考える事ができる。ACC の亢進は心の痛みの増進に、MPFC の亢進は抑うつ増進に関与すると考えられており（e.g., 吉村, 2012）、賞賛獲得欲求はストレスを増進させることでメンタルヘルスのリスクを高める欲求と考えられる。

以上のことから、賞賛獲得欲求は低次と高次のどちらの欲求と考えられるのか、そしてメンタルヘルスのリスクを高めるのか軽減するのか検討する必要があると言える。

2. 本研究

本研究は賞賛獲得欲求が高次か低次か検討する研究として被受容感・被拒絶感（杉山・坂本, 2006）、甘えの断念（杉山・坂本, 2001）、自己没入（坂本, 1997）、そして社会的スキルへの確信の賞賛獲得欲求への関与を検討して欲求の次元を考察し、次に賞賛獲得欲求がメンタルヘルスの問題への関与が考えられる被拒絶感または自己没入の効果を増進するか軽減するか検討する。

前者の検討課題について、本研究では調査研究を通して賞賛獲得欲求を高次の欲求とした場合の仮説モデル（Figure 1）、低次の欲求とした場合の仮説モデル（Figure 2）のどちらが採択されるか検証する方法を取る。Figure 1, Figure 2 の共通部分について、本研究では他者が自分を蔑ろにするという一種の社会的不信感である被拒絶感を社会的排斥リスク関連要因と設定した。他者が信頼できない場合、安全確保資源は自分だけになるので他者を頼りにしない志向性である甘えの断念が高まると考えられる。また、被拒絶感は先行研究でも人を自己調整に動機づけて自己没入を高めることが示唆されているが（杉山・坂本, 2006）、甘えの断念は安全確保資源としての自己の重要性を高めるので自己没入を高めると考えられる。一方、被受容感は「自分は他者から大切にされている」という実感であり、社会的安全

の確保の指標と考えられる。他者への信頼感や社会的な積極性を高めるものと考えられる。つまり、他者を頼れるものと捉えて甘えの断念を軽減し、社会的スキルへの自信が増進すると考えられる。なお甘えの断念の軽減は社会的スキルへの自信を直接増進するとも考えられる。

Figure 1 について、賞賛獲得欲求が高次の欲求であれば社会的排斥リスクの延長線上にあると考えられる自己没入とは負の関係または無関係と考えられる。また、社会的安全の達成の延長線上にある社会的スキルへの自信と正の関係が見出されると考えられる。Figure 2 について、賞賛獲得欲求が低次の欲求であれば自己没入と正の関係、社会的スキルへの自信と負の関係、または無関係が見出されると考えられる。

後者の検討課題について、被拒絶感と自己没入は一種の自己意識と考えられるが、先行研究から抑うつを促す要因であることが示唆されている（杉山・坂本，2006）。また、自己没入にはネガティブな気分が伴うことも示唆され（坂本，1998）、被拒絶感もネガティブな情緒が伴うことが示唆されている（杉山・坂本，2006）。すなわち、被拒絶感、自己没入が高まることはそれ自体が特殊な自己意識に由来する一種のストレスであると言えるだろう。賞賛獲得欲求が高次の欲求として VLPFC の亢進と関わるのであれば被拒絶感や自己没入によるストレスによる苦悩を軽減させ、抑うつ傾向を軽減すると考えられる。仮に相対的に低次の欲求として、ACC や MPFC の亢進を神経基盤とするのであれば心の痛みを増進させて、

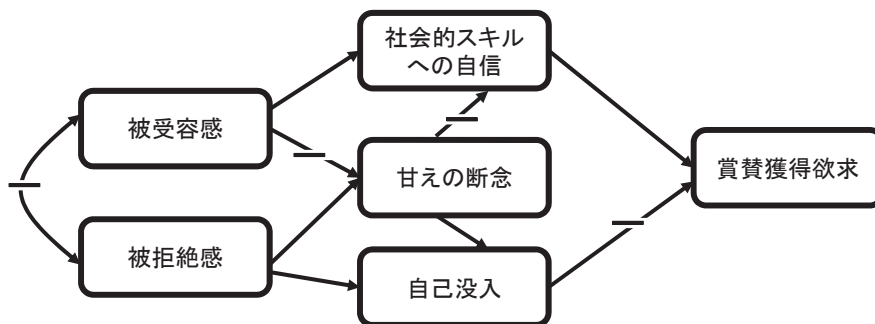


Figure 1：賞賛獲得欲求を高次の欲求とした仮説モデル

→は正の因果関係、-が付随した→は負の因果係数または無関係の可能性を表す

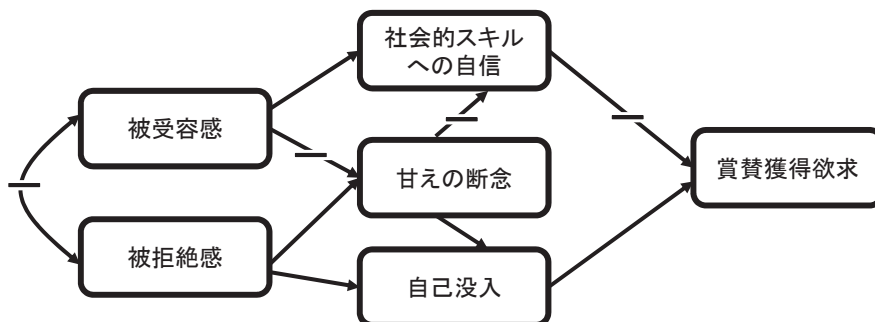


Figure 2：賞賛獲得欲求を低次の欲求とした仮説モデル

→は正の因果関係、-が付随した→は負の因果係数または無関係の可能性を表す

抑うつ傾向を増進させると考えられる。

3. 方法

大学生を対象とした調査研究を実施した。20xx 年 12 月、18 歳から 23 歳の大学生 230 名を対象に質問紙を配布・回収した。質問紙はヘルシンキ宣言に基いて対象者に日常生活で受けると思定される負荷を超えないように構成し、倫理的配慮として回答は任意であり拒否することによる不利益はない旨を書面と口頭で繰り返し確認した上で回答を得た。本研究における質問紙は以下のように構成されている（なお、抑うつ傾向を除く全ての尺度で「全く当てはまらない (1)」, 「よく当てはある (5)」とした 5 件法で回答を求めた）。

1) 賞賛獲得欲求：小島ら（2003）の作成した賞賛獲得欲求尺度から対象者の負担を考慮して次の 3 項目を抜粋した。「皆から注目され、愛される有名人になりたいと思うことがある」「初対面の人にはまず自分の魅力を印象づけようとする」「人と話すときはできるだけ自分の存在をアピールしたい」

2) 被受容感・被拒絶感：杉山・坂本（2006）の作成した尺度は各 8 項目で構成されていたが、対象者の負担を考慮して本研究では代表作成者と相談の上で構成概念との関連が特に深いと考えられる各 2 項目を抜粋した。「私が行くと喜ばれる場がある」「私はたいていの場で認められている」（以上、被受容感）, 「私は、普段人から背を向けられている」「私は、よく人からないがしろにされる」（以上、被拒絶感）。

3) 甘えの断念：杉山・坂本（2001）の作成した尺度は 5 項目で構成されているが、対象者の負担を考慮して、構成概念との関連が特に深いと考えられる以下の 2 項目を抜粋した。「人に期待をしてはいけないものだ」「私を守るのは私だけだ」。

4) 社会的スキル：若林ら（2004）は自閉症スペクトラム指標（以下、AQ）を測定する尺度を作成しているが、その下位尺度の一つが社会的スキル尺度である。この尺度は自閉症スペクトラムの傾向がある人には乏しいと考えられる社会的スキルへの志向性や自信を表す項目で構成されている。本研究は一般の大学生を対象にしたものであるが、社会的スキルの志向性や自信を測定しているので全てが自閉症スペクトラムの神経基盤に基づくとは考えにくい。経験の中で獲得した社会的な効力感や他者への信頼や興味も反映していると考えられる。そこで以下の 3 項目を抜粋して尺度を構成した。「何かをするときには一人でするよりも他の人と一緒にする方が好きだ（逆転項目）」「自分の置かれている社会的な状況（自分の立場）がすぐにわかる（逆転項目）」「新しい友人を作ることは難しい」。なお、集計においては若林ら（2004）に倣って社会的スキルの欠如感が高いほどスコアが上がる形で集計している。

5) 自己没入：坂本（1997）は 11 項目版で測定する尺度を作成しているが、本研究では対象者の負担を考慮して杉山・坂本（2006）で活用された 5 項目版を活用した。

6) 抑うつ傾向：抑うつを測定する尺度として SDS（Zung, 1965）を使用した。「ほとんどいつもない (1)」から「ほとんどいつもある (4)」の 4 件法で回答を求めた。

4. 結果

以下の統計解析は欠損値が目立つ 19 名を除いた男女 220 名を分析の対象に行った。

4-1. 基礎統計

本研究の各尺度の項目は信頼性と妥当性が確認された尺度から抜粋されているので一定の妥当性は備えていると考えられる。ここでは抜粋によって再構成した尺度の信頼性を α 係数をもとに検討した。各尺度の平均値・標準偏差と α 係数、各変数間の相関係数を Table に示す。全ての尺度で信頼性を示唆する結果になっている。なお男女差が想定されるため、これ以降の分析は男女別に行っている。

	1 賞賛獲得 欲求	2 被受容感	3 被拒絶感	4 甘えの断念	5 社会的 スキル	6 自己没入	7 抑うつ傾向	平均 (M)	SD
1	1.000	0.333	-0.234	-0.295	-0.515	0.267	-0.044	9.011	2.868
2	0.179	1.000	-0.310	-0.272	-0.545	-0.012	-0.473	7.118	1.594
3	0.096	-0.294	1.000	0.493	0.403	0.156	0.595	5.054	1.683
4	-0.069	-0.185	0.306	1.000	0.434	0.244	0.403	6.161	2.097
5	-0.209	-0.317	0.265	0.227	1.000	-0.007	0.442	8.430	2.238
6	0.159	-0.137	0.429	0.299	0.235	1.000	0.242	17.645	4.740
7	-0.087	-0.331	0.443	0.345	0.282	0.532	1.000	44.441	7.777
M	8.850	7.100	4.292	6.350	8.233	17.433	45.833		
SD	2.743	1.399	1.440	1.886	2.024	5.135	6.865		
α	0.766	0.699	0.755	0.636	0.384	注) 男女混合の結果			

Table：各尺度間の相関係数，平均値，SD（右斜め上：男性， $n=93$ ／左斜め下：女性， $n=120$ ）

4-2. 高次・低次の検討：共分散構造分析

共分散構造分析に Figure 1, 2 を表すモデルを投入し，無意味であることが示唆されたパスを削除し，誤差変数相互の相関関係から有意な可能性があるパスを追加するといったプロセスを重ねて男女別に最適なモデルを検討したところ，男性は Figure 3，女性は Figure 4 が見出された。男女共通で賞賛獲得欲求は社会的スキルによって増進され，また自己没入によっても増進されていた。本研究では賞賛獲得欲求が高次の欲求であれば社会的スキルに増進され，低次の欲求であれば自己没入によって増進されると仮定していたが，社会的スキルと自己没入の両方によって増進されていた。本研究の範囲では高次の欲求とも低次の欲求とも判断がつかない結果になったといえるだろう。

4-3. 抑うつ傾向との関連の検討：部分分散分析

次に高被拒絶感，高自己没入という自己意識に由来するネガティブな情緒が伴うストレス状態で，賞賛獲得欲求が抑うつ傾向にどのように作用するか部分分散分析（坂本，1997）を用いて被拒絶感と賞賛獲得欲求の交互作用，自己没入と賞賛獲得欲求の交互作用を検討した。

被拒絶感と賞賛獲得欲求については，男性では被拒絶感の主効果（ $p<.001$ ）が有意，交互作用が有意傾向（ $p<.10$ ），女性では被拒絶感の主効果のみが有意（ $p<.001$ ）であった。

Goodness of Fit Index (GFI)=0.986
 GFI Adjusted for Degrees of Freedom (AGFI)=0.941
 RMSEA=0.000

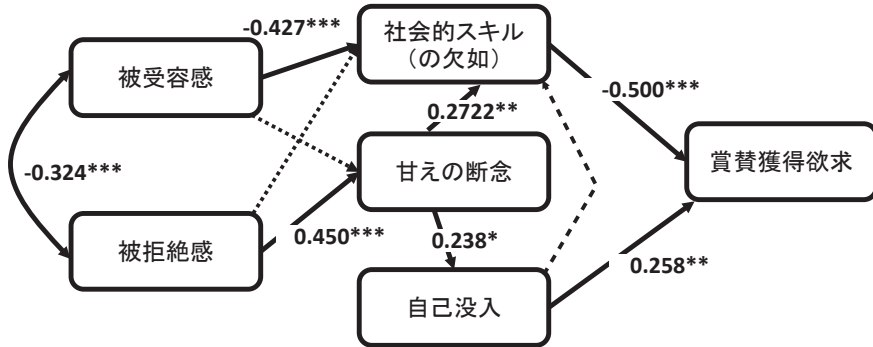


Figure 3：男性の結果 (n=95)

実線部分の→は統計的に有意, 点線の→は非有意な関係を表す

*** : $p < .001$, ** : $p < .01$, * : $p < .05$

Goodness of Fit Index (GFI)=0.988
 GFI Adjusted for Degrees of Freedom (AGFI)=0.938
 RMSEA=0.026

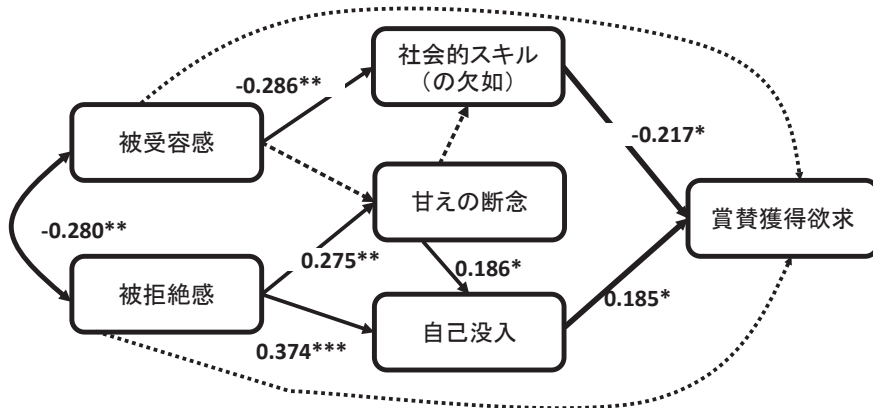


Figure 4：女性の結果 (n=123)

実線部分の→は統計的に有意, 点線の→は非有意な関係を表す

*** : $p < .001$, ** : $p < .01$, * : $p < .05$

男性における交互作用の内容を検討したところ, Figure 5のように被拒絶感が高いと賞賛獲得欲求が高いことで抑うつ傾向が増進される可能性が示唆された。

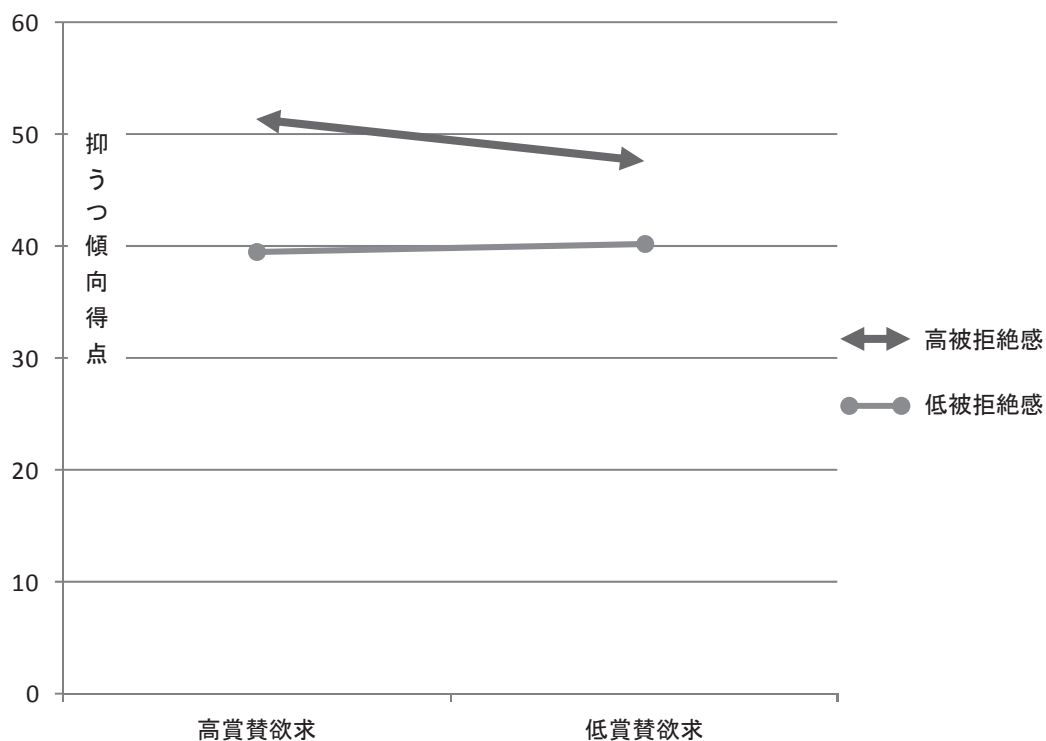


Figure 5：男性における抑うつ傾向への被拒絶感と賞賛獲得欲求（賞賛欲求）の交互作用

自己没入と賞賛獲得欲求については、男性では自己没入の主効果のみが有意 ($p < .05$), 女性では自己没入の主効果 ($p < .001$), 賞賛獲得欲求の主効果 ($p < .05$), 交互作用 ($p < .001$) がいずれも有意であった ($p < .001$)。女性における交互作用を検討したところ, Figure 6 のように自己没入が高いと賞賛獲得欲求が高いことで抑うつ傾向が軽減される可能性が示唆された。

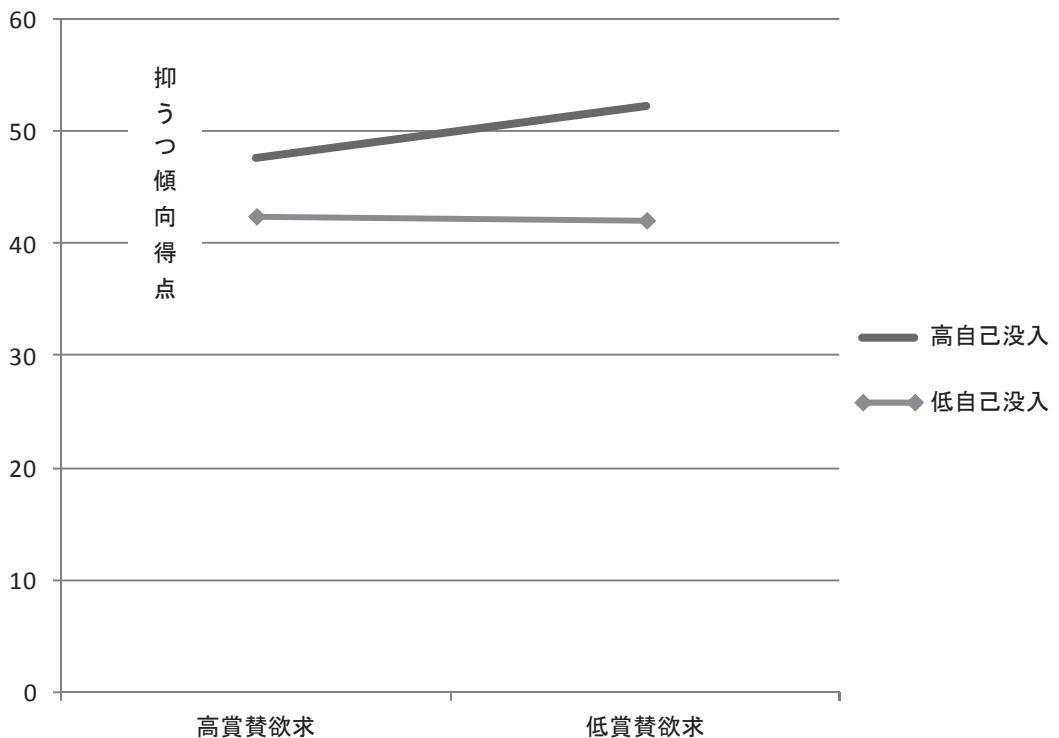


Figure 6：女性における抑うつ傾向への自己没入と賞賛獲得欲求（賞賛欲求）の交互作用

5. 総合考察と結論

共分散構造分析の結果は、男女ともに賞賛獲得欲求が自己没入と社会的スキルの双方から増進されていた。本研究で測定した賞賛獲得欲求には自分への自信と懸念の双方が入り混じっていると考えることができる。すなわち、賞賛獲得欲求は Maslow の欲求階層説における低次の欲求と高次の欲求の狭間に位置し、何らかの葛藤を生む、あるいは葛藤の結果生まれた欲求である可能性が示唆されると言えるだろう。

また、部分分散分析の結果は女性では自己没入が抑うつ傾向を増進するのを緩和する可能性も示唆された。しかし、男性では被拒絶感と抑うつに関連をさらに増進する効果が見られていた。つまり、賞賛獲得欲求は女性に限れば心の痛みの緩和をもたらす可能性があり、高次の欲求の可能性と痛みの緩和をもたらす VLPFC の亢進と関与する可能性が示唆されたと言える。一方で、男性では被拒絶感による抑うつの増進をさらに増強する可能性が示唆され、社会的な排斥リスクに関連した低次の欲求の一つとしての側面も考慮しなければならないだろう。

一般的に女性は場依存性が高く（杉山，2010b），他者からの影響を受けやすい。女性として賞賛を獲得したいと求めることは、相対的に男性よりは自己確認的な意味が強い可能性も考えられる。賞賛獲得欲求にどのような意味があるのか，男女別に考察し，必要ならば男性における賞賛獲得欲求，女性における賞賛獲得欲求とそれぞれに定義する必要があるのか

もしれない。

また、賞賛獲得欲求はここまで考察してきたように、やや複雑な背景を持つ欲求である可能性がある。日本の男性におけるセロトニントランスポーター遺伝子多型との関連についての研究でも、日本人に多い敏感になりやすい遺伝傾向では賞賛獲得欲求が喜びも苦痛ももたらすアンビバレントな心性である可能性が示唆されている（岸田ら，2016）。したがって、動機づけの一要因として機能する時は、その複雑さを反映した複雑な動機づけを生み出すのかもしれない。

たとえば被拒絶感による不快感を減らすために賞賛獲得欲求を高めている個人は、賞賛を得ることで一時的に被拒絶感が緩和するものの、他者の注目が集まることで他者の視線の向こうに拒絶的な態度を連想する機会が増えてしまう。このアンビバレントで結果的にストレスが増し心理的な不調に陥る可能性も考えられる。今後はこのような側面を多面的に検討できる研究デザインが必要となるだろう。

最後に本研究は対象者の負担を考慮して複数の尺度で大幅な抜粋を行っている。特に賞賛獲得欲求はそれ自体が「魅力への賞賛」「能力への賞賛」と2因子に別れる可能性も示唆されており（小島ら，2003）、短縮しない尺度で改めて検討する必要がある。今後、さらに概念を精査し、対象者に無理のないデザインでより信頼できる資料を収集しなければならないと言えるだろう。

【引用文献】

- 福田一彦・小林重雄（1973）自己評価式抑うつ性尺度の研究，精神神経学雑誌，75，673-679.
- 岸田文・崔多美・綿貫茂喜（2016）若年日本人男性におけるセロトニントランスポーター遺伝子多型と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の関連，日本生理人類学会誌，21（3），115-119.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介（2003）賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み，性格心理学研究，11，86-98.
- 小島弥生（2016）LINEでの友人関係の形成および維持への意思に賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が及ぼす影響，埼玉学園大学紀要，人間学部篇，（16），53-64.
- Leary, M. R., & Kowalski, R. M., (1990) Impression management: A literature review and two-component model. *Psychological Bulletin*, 107, 34-47.
- Maslow, A. H. (1943) A theory of human motivation. *Psychological Review*, 50 (4), 370-396.
- 荻阪直行（2007）意識と前頭葉—ワーキングメモリからのアプローチ，心理学研究，77（6），553-566.
- 坂本真士（1997）抑うつと自己注目の臨床社会心理学，東京大学出版会.
- 坂本真士（1998）自己注目と抑うつ：抑うつ発症・維持を説明する3段階モデルの提起，心理学評論，41（3），283-302.
- 杉山崇（2010a）10章動機づけ，福田由紀（編）心理学要論，培風館.
- 杉山崇（2010b）12章心の個人差，福田由紀（編）心理学要論，培風館.
- 杉山崇（2014）臨床心理学における自己，心理学評論，57（3），433-447.
- 杉山崇・馬場洋介・原恵子・松本祥太郎（印刷中）キャリア心理学ワークブック，ナカニシヤ出版.
- 杉山崇・坂本真士（2001）被受容信念尺度の作成とその抑うつ過程の検討，日本健康心理学会第14回大会発表論文集.

- 杉山崇・坂本真士（2006）抑うつに対する対人関係要因の研究，健康心理学研究，19（2），1-10.
- 若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S., & Wheelwright, S.,（2004）自閉症スペクトラム指数（AQ）日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討，心理学研究，75（1），78-84.
- 吉村晋平（2012）認知行動療法の生物学的基盤，日本生物学的精神医学会誌，23（3），171-176.
- Zald, D. H., & Rauch, S. L.,（2006）ORBITOFRONTAL CORTEX, Oxford University Press（Japan）Ltd.
- Zung, W. W. K.（1965）A self-rating depression scale. Archives of General Psychiatry, 12, 63-70.

注）この研究の一部は科学研究費助成金（15K13148）の補助を受けた。